



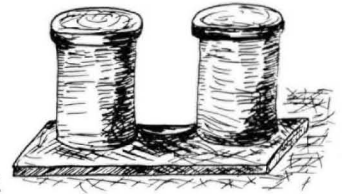
タイトル Title	ビットと呼ぶかボラードか(Bitt or Bollard?)
著者 Author(s)	杉浦, 昭典
掲載誌・巻号・ページ Citation	海事資料館年報,4:17
刊行日 Issue date	1976
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	10.24546/81005851
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81005851">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81005851</a>



係柱（曲柱）

## ビットと呼ぶか ボラードか

杉浦昭典



双係柱

「港の雨は淋しいな」という戯曲「商船テナシティ」の台詞から思い浮かぶ波止場風景に、船の係留索をかけ止める係柱の存在を欠くことはできない。岸壁の端にある才頭頭か握り拳に似た頭の短い柱のことである。船乗りはこれをビットと呼び、造船所や港湾の関係者はボラードという。

もっとも港湾関係では岸壁の端にある拳骨頭の係柱を曲柱、奥の倉庫近くにある背の高い真っ直ぐな係柱を直柱と呼んで区別し、曲柱をボラード、直柱をビットというようである。ところが、船乗りにとって陸上の係柱は曲柱であろうと直柱であろうと押しなべてビットであり、ボラードというのは船の甲板上にある2本一組の双係柱のことなのである。

造船関係者の使う日本工業規格に2本一組の双係柱はボラードとして明記されている。ビットもボラードも英語であるから、この場合は複数形の bollards で示される。しかし、文部省編集「学術用語集（船舶工学編）」ではビットもボラードも全く同義語として扱われており、船乗りのいほどの区別はされていない。

日本の船乗りが、甲板上の双係柱をボラード (bollards)、岸壁上の単係柱をビット (bitt) という風にはっきり使い分けている根拠は、船員教育機関で使われて来た船舶運用術関係の教科書、参考書、海語辞典の類にある。すべてこのように明確に区別し、その逆の呼び方はあり得ないように解説されているせいであろう。

だが、試みに数種類の英和辞典をひもといて見るとしよう。その表現に多少の違いこそあれ、bitt は通例複数形で甲板上の双係柱のことであり、bollards は岸壁または棧橋にある単係柱のことだとなっている。これらの原典である英米の主な英語辞書、例えばオックスフォード英語辞典 (O. E. D.) などを見ても同様である。

そこで英米版の船舶運用術関係の書物に当た

って見ると、18世紀の書物には bitt だけで bollard はなく、19世紀に入ってからのものに両方出て来るが、やはり bollard は陸上用で、例外として、捕鯨ボートのもり綱を巻き止める柱と曳船の曳索柱をそう呼ぶ以外、甲板上の係柱は bitt または bits と呼ばれるのが普通である。

語源的に見ても bollard は bole (樹幹) の語尾に ard を付けた陸岸の係柱らしい表現であるのに対して、bitt の方はやや不明確であるとはいえ船材または船体の一部を表す言葉であり、甲板上の係柱を指すと見るのが自然である。

最近発表された政府間海事協議機関 (IMCO) の航海関係標準英語用語集によると甲板上の双係柱が BITTS/BOLLARDS、岸壁上の係柱が BOLLARD となっている。英語以外の独、仏、西、露の各国語による表現もほぼこの例と一致している。すなわち岸壁上にある単係柱はボラードであり、甲板上の双係柱は複数形で示すビットまたはボラードである。甲板上の双係柱はビット (bits) 以外の何ものでもないと決め付けたいところだが、長い間に生じた誤解と混乱による慣習を無視することができず、このような結論に落ち着いたものと推測される。

港湾関係者のいう直柱は、もちろんボラードの範疇に入るが、mooring post と呼ぶ方が無難でもある。修理船渠の周辺にボラードの他、双係柱や十字形の係柱が設けられているのは、係留索を船からではなく陸の方から出すという特殊事情によるためである。

しかし、それでもなお岸壁上の係柱をビットと呼んでボラードといわず、甲板上の双係柱をボラードと呼んでビットと叫ぶ日本船員の慣習は明らかに誤りである。また、その矛盾が認められたとしても、明治以来、多年にわたって植え付けられて来た慣習をここで改めることはきわめて困難なようである。